人文会ニュース

1994. 9

書店人が語る
人文書の生き残り方
……大盛堂書店 渡辺　晃
……リプロ池袋店 木村　斉
……東京堂書店 小島清孝 1

「養蜂販売」のすすめ
……講談社雑誌営業局 永井祥一 14

「人文会図書」購入をめぐって
……青山学院大図書館 山村　修 18

〔人文書講座31〕
流動化するアジアを読む
……国際基督教大学 姜　尚中 21

94年度委員会活動について …… 30

70

幕末維新から戦後の五五年体制の成立まで
世界史的視野から、激動の時代の光と影に迫る。

近代日本の軌跡

全10巻
既刊7冊

❶明治維新……田中　彰編
❸日清・日露戦争…井口和起編
❹大正デモクラシー…金原左門編
❻占領と戦後改革…中村政則編
❼近代の天皇……鈴木正幸編
❽産業革命……高村直助編
❾都市と民衆……成田龍一編

〈続刊〉❷自由民権と明治憲法…江村栄一編
❺太平洋戦争…由井正臣編
❿「帝国」日本とアジア…浅田喬二編

隔月に一冊ずつ刊行中
四六判／平均二七〇頁
●定価三〇〇円～三四〇〇円

吉川弘文館
東京都文京区本郷7-2-8／電話03-3813-9151

京都の禅寺散歩
◉竹貫元勝著
定価2200円

全国・石仏を歩く
◉庚申懇話会編
定価1980円

多摩のお寺めぐり
◉坂本・塩入・鈴木・根本編
定価2200円

全国書の名蹟めぐり上下
◉駒井鵞静著
定価各2987円

雄山閣　＊価格は税込みです
千代田区富士見2/振替00130-5-1685

アントニオ・グラムシ　上村忠男◉編・訳

新編▼現代の君主

獄中ノートから29編を新たに編集。意欲的な新訳・訳注で読み解く。
●¥3296

加藤哲郎◉著

モスクワで粛清された日本人

30年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇
暴かれた日本人粛清史・痛恨の一頁！
●¥2987

青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60[税込]
TEL[03]3219-2341　FAX[03]3219-2585

有斐閣 出版案内（定価は税込み）
東京・神田・神保町2 Tel:03-3265-6811

◉社会学界の総力を結集して完成した本格的大辞典

新社会学辞典

編集代表
森岡清美
塩原　勉
本間康平

●B5判／上製／箱入／一七三六頁（本文　6ポ／2段／横組み）　定価二〇六〇〇円

●現代社会学の共通言語の確定と意味の標準化を目ざす
研究領域の拡大と分化、新しい理論形成や隣接分野との交流、国際化の進展等によって捉えにくくなった現代社会学の全体像を描き出し、今後の研究のための共通の基盤を提供する。

●隣接諸科学、新しい科学へ細心の注意を払い、成果を収録
とくに心理学、文化人類学、法社会学、精神分析学、経済史、社会史、社会統計学等については十分に配慮し、項目の選択と叙述を行なった。記号論、現象学、構造主義等の用語も採録した。

◉総収録項目
＝約六〇〇〇件
◉執筆者総数
＝五二二名

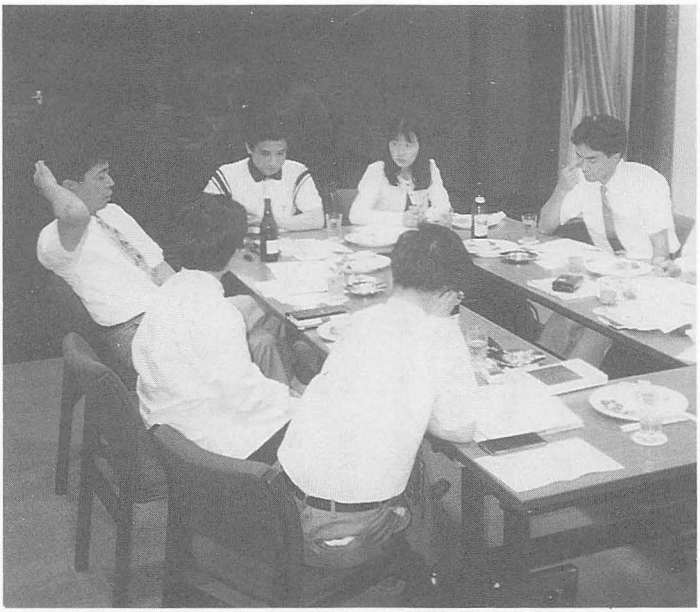
書店人が語る

「人文書の生き残り方」

〈出席〉渡辺　晃（大盛堂書店）
木村　斉（リブロ池袋店）
小島清孝（東京堂書店神田本店）
西谷雅英（未来社）＝司会
原田敦雄（大月書店）
吉田信夫（東京大学出版会）

西谷（司会）　今回は「人文書の生き残り方」というテーマで、都内の書店人の方三人にお集まりいただきました。人文書は今いろいろな意味で風向きが悪くなっているといわれていますが、その問題点は何なのかを、今動いている書店状況や出版状況にかちめて率直にお話しいただければと思っております。では最初に渡辺さんから、今日の企画について口火を切っていただきます。

渡辺　書店というのは表現はちょっと下世話ですけど「他人の褌で相撲をとっている」という、そういう感じをぬぐい切れないところがあります。われわれ書店側の声なり判断なりはマーケティングリサーチとして出版社のほうではかなり気にされている部分はあるんだろうと思いますけど、基本的にはメーカーである出版社がいい玉を出してくれないことにはどうあがいてみたところで、難しいんじゃないでしょうか。人文書というジャンルも分類上の定義ははっきりしていますが、書店の現場のレベルでは、図書館とは違いますから、厳密な意味でこれは人文書でこれは人文書でないと判別するようなことを日常業務で意識してしているわけではありません。まあそのへんが象徴的に感じられたのが、二、三年前の



◁左より渡辺氏、小島氏、一人おいて木村氏。

「新・新宗教ブーム」で、「幸福の科学」とか「オウム真理教」とかがえらく過熱した時期ですね。あのときにある版元の営業の人が、地方でも人文書が活気づいているというので行ってみたら、要するにその手の本だったという話もあるくらいです。そういうわけで、我々の日常業務レベルでは、人文書という定義はかなりアバウトであるということです。噺家の自虐的〝マクラ〟に擬えるなら、書店員という稼業は〝馬鹿じゃできない、利口ならなおやらない〟その程度のものだと思っています。

■『知の技法』をめぐって

司会　最近、会員社である東大出版会から人文書では久々の大ヒット『知の技法』が出ました。人文書としては同じく会員社の勁草書房から出た『構造と力』以来の十年ぶりくらいのヒットです。マスコミの効果とかいろんな話題がこの本を巡って出てきましたし、また人文書に縁のない人が、こういう高度な入門書を手に取るなど、いろいろな波及効果をもたらしました。年に一冊本を買うかどうかという方たちまでが手に取ったという、そういう本なわけですけど、そのことについて木村さん

から少しお話しいただければと思います。

木村　『知の技法』が出る前に去年の段階で『ユニバース・オブ・イングリッシュ』という本があったんです。これは東大の大学改革の一環として東大の教養部の英語の教科書として作られたものですが、これが出たときに、「アエラ」ですごい特集が組まれて、その影響で教科書としてはまさに異例の売れ行きを示しました。僕なんかも現場でそれを実感できたんですが、そのころから人文書で今度この手のものが出るという話はきいてました。それで、まあ英語の教科書以上の反応はあるだろうという見込みはありましたが、今ほどの売れゆきを示すとは思いませんでしたね。三省堂さんでしょうか、最初にこれは売れるという反応を示したのは。僕なんかは最初は並のというか、人文書の中では売れるかなというくらいの数の発注しかしなかったんですけど。それがテレビ、マスコミで取り上げられて売れてきた。夜の遅い時間帯のニュースで取り上げられたので、読者としてもこちらがある程度予測していた層、中堅サラリーマンぐらいの読者層が買うようになった。ニュースの流れ方が、すごくタイミングよくて、しかも集中してマスコミに出るんじゃなくて、週一回くらいづつ断続的に流れたのも効果的でした。振り返ると毎週毎週、だいたい同部数くらいの売り上げがあったわけです。ですからこちらも非常に注文の部数を決め易かったんです。

　そのころリブロでお買い上げになっているお客さんというのは、中堅サラリーマンで青春時代に「東大」を意識されたような方という印象が強かったわけです。東大を卒業された方、あるいは東大を小学校のころは受けようと思っていた方といろいろな方がいらっしゃると思うんですけど。ある程度お客さんを絞り込めて、またそういうお客さんというのが人文書を売って行くときの最大のターゲットになる層だと思いましたね。ですから関連書というか、たとえば『知の技法』に載っている参考文献を回りに並べてみたりするとそれなりに反応がありました。つまり『知の技法』一冊で終わらないお客さんだったわけです。その本を読み込める力もおありでしょうし、人文書といわれるジャンルの本に興味をもたれている方というのが多かったと思うんです。

　ところがＮＨＫの朝の「おはよう日本」で取り上げられてからは、ちょっと人文書の殻を脱いだというか、一

般書に変わってしまいました。いわゆるベストセラーの売れゆきになったかなあと、お客様を見ていて感じましたね。レジに来て「知の何とかって本、ある」って聞くお客さんが出てきました。

渡辺　あと学生のカップルも目につくようになりましたよね。「読んだ?」とか「買った?」とかそういうノリのね。

木村　カップルで話題になっているのって大きいですよね。

渡辺　そうですね。まあ、熟年パワーのおばさんネットワークの精神世界（の本）には負けますけど。あれに勝るパワーは感じられませんよ、最近の本の売れ方みてもね。本当に強いものがありますけどね。いわゆるテキストみたいにして、読書会とかそういう使われ方ってのが熟年女性でサークル的にやっているところに非常に多いですよ。だから、そこにうまくはまると本の内容の是非はともかくすごい化け方をします。

木村　本当に人文書って売れないわけですよ。月単位で売れた冊数を一覧表にしてみれば、人文書というのは決して上位にはあがってきません。人文書だけの一覧表を作っても、その中で上位にくるのは精神世界のジャンルと社会時事関係のビッグネームしかない。だからちょっと精神世界なんか担当していると、勘違いしたりするんですよ。なんか、自分の仕入れの力で売れているんじゃないかって（笑）。

■「冊数至上主義」と文化的価値

渡辺　ただ、一方で感じるのは、とにかく今の日本の出版界の基本的な評価の基準が、何冊売れたかという「冊数至上主義」だということです。そういうところがなかなかふっ切れない。ちょっと気のきいた出版社なら年間のデータで冊数ランキングと総販売金額ランキングの両方出しているところがありますけどね。冊数では人文書は、たしかに文芸書やビジネス書、娯楽姓の強い本に比べて苦戦しているのは事実かもしれない。ただ総販売金額という点ではかなり頑張っているというか、そんなに苦戦しているのかなという気もしないではない。

小島　一点ごとの冊数ということで言えば人文書は売れる本が出にくいといえる。でも『知の技法』のように売れている本があるということは、必ずしもその分野自体

が一般読者に受けいれられないというのではなくて、なんらかの伝える方策がととのえば企画によっては売れるということになりますよね。

司会　でも朝のテレビ番組で本が扱われるというのは一種のアクシデントみたいなものですよ。結局、人文書は、ある特定の少数の知識人なり読書人を対象にしていて、暮らしの中に入ったということがいままでなかったと思うんですね。それが偶然「おはよう日本」という番組で紹介されることによって普通に暮らしている人たちが買いに来てくれた。つまり、我々の出している本でも取り上げられ方次第では、何万部単位で売れて行く可能性もないわけではない。ただ、そういうふうになかなかならないわけだし、やっぱり数千部をどういうふうにこつこつ売って行くのかということで、こちらはいつも苦心しているわけです。

小島　今のお話のように、もともと売ることが困難なことが分かり切っていても、流行を追った「写真集」であるとか、コミックとかは決して出そうとしない。むしろ人文会の方たちが（なぜ売れないと分かっている）本を一所懸命作っているのかということを私たちに聞かせていただいたほうが、今後売るときに、力（リキ）が入るんじゃないかなと思うんですけどね。

司会　本作りというのには、満足度というものがあると思うんです。たとえば三千部売れて満足するものと三万部売れても満足しないものがある。その数字では表われてこない何かが我々の生き方の中に手離せない文化的価値としてあるのじゃないか。ただそれを商売として成り立たせていかないといけない。単なる自己満足で終わらせてはいけないですね。そこのところが難しい。

小島　そうですね。今の時代は売れる本がいい本と言われています。そこで冊数のいかない人文書は肩身が狭くなるわけです。でも、もともと本にはその本のジャンルによって、百万万部売れたら成功というジャンルと、五千部売れたら成功、二千部が成功というのもあるでしょう。百万部のジャンルの本と二千部の本を一緒に比較してみてもそれは無理ですよ。比較してはいけないものだと思う。何とかしてそのジャンルで成功といわれる部数に近づけていく。書店の側でいえば、棚づくりの中にそのような人文書も含める。仕掛けなり、仕組なりをやっていくのが重要だと思う。出版社は売れると思って作っ

ていて、事実必要とするお客さんがいるわけだから。

木村　僕の職場は、若い女性の社員が圧倒的に多いんです。入社して一年だとか、二年だとか、ほとんどそのくらいの年齢層の社員でやっているわけなんですけど、いま、お話に出てくるような本の単価ですとか、その本のもつ付加価値ですとか、そういうのっていうのは、日常の仕事のなかではものすごく見えにくい部分なわけです。本屋の仕事として一番覚えやすいのは冊数を売ることで、冊数売れるとその担当者というのは満足度が高い。だから、ちょっとほっとくと文庫ばっかりになってしまう。何々が、文庫になったというとその文庫を積んじゃう。すると冊数は伸びるわけで、前年のその冊数に比べて伸びたということで、喜びを得られる。僕なんかはやはり、その本が占める面積と値段とが一番気になるんでね（笑）。文庫は立てに並べないで横にしろよとか。

小島　ある編集者によれば、いま書店業界でもとめられているのは、木村さんがおっしゃったようなコストマネージメントができる書店員なんです。例えば、本の情報をもっているよりも、自分の担当しているフロアなり分野のコストマネージメントがきちんとできる人が優秀な書店員ということです。私みたいに、ひとつの分野を数十年やっているのは、必要ない。なぜそうなるのかというと、書店にはあらかじめ予定しうる「仕入れ」というものがない。予定した仕入れの範囲に近づけようとするのではなく、はじめから書店には主体性をもった「仕入れ」がないところから出発するのです。本のようなものは商えるでしょうが、そこらへんからみても人文書が、どういうふうに扱われるかという問題は出てきますね。

■ジャンルの多様化と棚づくりの工夫

原田（大月書店）　ところで『人文書のすすめ』の巻末に載った基本図書一覧を見ますと、今回新たに作られた批評・評論の分野の書目の数が一番多くなっています。哲学とか心理に入れられていたものがここに集まってきているようです。もともと人文書というのは、昔棚がなかったときに文学評論とか文明評論とかにくっついていて、そこから枝分かれしていったものらしいんですが、それがもう一度そこにまとまってきている気がします。また神秘思想というのが哲学・思想に入らないでこちら

にきているのではないかと思います。最近、この基本図書一覧で見られるように、宗教とか心理とかが二十年くらい前と比べて、本当に上がって来ているんじゃないだろうか。このジャンルの読者層に興味があるのですが。

司会　哲学・思想と宗教とがクロスしてどっちにも入れられないから、第三番目のジャンルを作ったんでしょう。結局この批評・評論というのは、ひとつのジャンルに集約できないものが、ここ二十年くらいのあいだに相当出てきてしまった、しかもそこが一番現代を映して魅力的なんだということだと思います。だから、浅田彰が出てきたときはまさにその時代の先駆けというか、その傾向を一気に噴出させた役割を担ったと思うんですけどね、歴史的に。

木村　ただ書店としては、この「新・新宗教」のお客さんをいかに人文書といわれるところに取り込めるかということをやっていかなきゃならないと思う。このジャンルのお客さんというのはこれしか買って行かないんですよ。十人くると九人まではその一派の本しか買わない。ただこのお客さんのうちの十人のうちのひとりでも、そこから次のステップへといけるように、そういう間口は書店の側で広げておかないと、やっぱりどんどん先細りの人文書にしかならないと思うんですよね。

僕なんかが日常仕事していて、ひとつのジャンルを担当するわけですけども、そのときに熟練というか、経験を積むことによって、そのジャンルについての知識が増えるわけです。ただ増えて行く中で、悪い傾向というのはお客さんを排除していっちゃんですよ。ですから、たとえば自分がそのジャンルの仕事をしていて、お客さんに本を聞かれたときに、「いや、その本はここにはありません」といって排除してしまう。そのお客さんを取り込める棚ができていない、棚を作れないっていうのはやっぱり書店の怠慢じゃないかな、とは思います。

原田　読者に直接本をすすめる機会がたまにあるのですが、そういうときに、この本の横にこれを置いてみようと並べ方変えてその本が売れたりするととても嬉しいわけです。おそらく書店さんは日常業務の中で棚を任せられて、こういう組み合せにしたら売れたとか、一万五千円の本まで買ってくれたとか、そういう喜びがあると思うんです。もちろん書店さんの毎日は大変だから、そういう時間も余裕もないという事情もあるかもしれません

けど、棚づくりのお話をうかがいたいのですが。

小島　うちの書店はそういった意味では、ずいぶん人文書を売っていると思うんです。担当者は自分の棚の中に自分なりの「コーナー」というものを持っているものなんですね。この本を売りたいなとか、これはそう多くは見込めないけど必要なものに違いないとか、そういうインスピレーションを持ったときに、伝えたい本を置くための秘密の場所というか、「書店の良心」というような特別のスペースが確保されているわけです。だからあの人のお気に入りの本は必ずあそこにおかれるなっていうのが、担当者ごとにわかるんです。そこに置いたら最低月に十冊とか週に五冊は売るというような自分なりの自負とか目的をもってやっているというようなことはありますね。原田さんのいうように力（リキ）を入れないと売れないものなんです。

司会　ただ、本当に熟練している人ですと、そのへんのノウハウが分かるんでしょうけど、いまのように本自体が分類しにくくなっていると、なかなか並べにくくなってきているんじゃないかという気もしますが、そのへんはどうなんでしょうか。

渡辺　それぞれのお店で教育システムがあるところとないところがありますからね。うちなんかでは学生パートタイマーの率が高くて、社員が休んでいる場合にはそこをカバーすることになりますが、ある程度できる子というのは、一緒にやっていると棚の作り方とか分かってきます。もちろん休み明けに出てくると、見当はずれなところに本が入っているというのは日常茶飯事で珍しくないんだけど、ただ逆にいうと自分で気がつかなかったような入れ方をこちらが再発見させられるということもあります。そういう面白みもあるわけですよ。で、その極端な例がね、最近うちであった事件なんだけども、音楽書の売場で、担当の社員が休んでいてパートタイマーの女の子が新刊とか補充とか棚のことをやったんだけど、一日で大胆に配置を入れ換えて、このジャンルはもう斜陽でこっちがメインなんだからって、大胆不敵に総入れ換えとまではいわないけど、相当棚を動かしちゃった。出てきた社員がもうびっくり仰天して。目鯨たてて怒る気にもならないほど大胆で、大変なことをやってくれたって感じでしたね。

原田　成果はあがったんですか？

渡辺　その後の顚末までは僕は知りませんけど（笑）。

原田　神戸の書店さんで心理学を専攻された女性が入って、二年目くらいから心理学の本を置き始めた。基礎的なもので絶対はずしゃいけないものからきちっとおいていって、さらに最近の流れをうまくつかんですごく回転がよくなった。神戸大の先生とかお客さんが吸い寄せられていく。そのへんを見ると書店の人のやり方によってはうんと変わるもんだなと思いました。

木村　だから諸刃の剣なんですよ。たしかに知識がある人にそのジャンルの仕事をやってもらうとそれなりの効果は出るんですけども、逆にさきほどいったように間口が狭くなっちゃうんです。自分以下のお客さんを排除してしまうというか。たとえば心理学だったら、「これは心理学じゃない」なんて切っちゃうわけですよ。自己主張も出るべきところは出なきゃいけないんですけども、頭が柔らかくないといけません。ある程度、いろんなお客さんが入りこめる要素というのを作っておかないと。

■復刊事業――良書の残し方

渡辺　特に人文会系の営業の方には多少、苦言めいたかたちで言っていることがあるんですけど、いわゆるリバイバルというか復刊事業が、当初の志や意義をだいぶ失って、単なる商業ベースに変質してきているんじゃないかという感じがするんです。最初のころにあった読者からリクエストを募って一定の数に達したら刷るといったいわゆるリクエスト復刊は、それなりの意義は充分あると思うんですけど。それがだんだんと惰性化してきている感じで。復刊という言葉がちょっと安易に使われ過ぎてますね。

木村　僕が思うのはいまの復刊のやり方はちょっと読者、書店サイドを無視しているんじゃないかという感じがしますね。本来なら復刊というのは書店がイニシアチブをとってもいいんじゃないかなと、僕は思うくらいなんですよ。この本の読者は、日頃お客さんにしているぞーという本を書店の側から出版社に復刊させるみたいなことが、なんでとれないのかなというのがすごく疑問に思っているんですよ。

吉田（東大出版会）　うちの場合は独自の復刊を四年前からやってきています。最初は創立四十周年のときでした。ＰＲ誌「ＵＰ」を使いまして読者にアンケートを実

施しまして、復刊希望書名を募りました。それ以降は毎年「秋の復刊」と称して、まとめて復刊しています。少部数の復刊ですから定価はどうしても高くなってしまいます。そこで「復刊基金」というのを設けまして、復刊のコストに当てて、少しでもお求めやすい定価を設定しています。広告もPR誌や新刊案内、チラシなどを通じて積極的に案内しています。

小島　本というのは必要になって探すときにはないことが多いですね。そういう意味では、かつて多くの読者に読まれたものが品切れになったままであるという状況は書店員の立場でいうとおかしい。できるだけ需要にあった形で、刊行をつづけてほしいという要望はあります。ただ、そのまま復刊とか重版とかされてもあんまり効果的ではないというのが、現状でもあるわけです。どういうふうにしたら効果的なのかは私の立場ではいいようがないんです。いまその世代にいる人とか、これから育ってくる人に向けて、かつての名著とかロングセラーを復刊されるときに、そのままやっても、古いなというものにしかならないんじゃないかと感じます。事実、復刊は復刊どまりであって、それがまたロングセラーで生き残ったというのはあまり聞かない。復刊しなきゃとかいまできるから復刊しようという事情だけじゃなくて、なんか仕組がいるんじゃないかと思います。むしろ廉価版とか、文庫とはいいませんけど、新装版とかで新たな出発を計るとか、そういうことも考えたほうがいいのでは。

原田　それは版元にとっては大変難かしい問題だと思います。復刊の場合、部数は三百部くらいでやりますから値段は倍くらいになっていくわけです。それを廉価版でということになると難かしい。だからそういう発想には飛べないところがあるんです。うちでも二十点くらい復刊したけど、なかには五刷りくらいまでなっているものもありますからね。そうするといったい切らしていた空白の期間って何をやっていたのかと思ってしまう。

司会　例えば、研究書などで本の巻末の参考文献一覧に載っているような古典的名著が、版元に問い合わせたら結局品切れですっていうのが研究者にとっては非常に困るわけで、そこをもう少し何とかできないものか。それこそ人文会で連合しながら棚を確保するようなかたちでやっていくことも必要なのでは。かつて、大学生協連が

復刊事業をやったときも、そういった考え方だったと思うんですよ。最初のときは東大さんと岩波と未来社の三社でやって、成果をあげました。その後、大学生協連が枠を広げて段々水増しになって、いつのまにか雲散霧消していったということがある。だからある程度間口は狭くてもいいから、それを持続的にやっていく運動を書店さんと協力してすすめていけるというのが、一番いいやり方だと思うんですけど。

■人文会の課題

木村　ただどうなんですかね。いまいろいろとお話を聞いていると、僕の現場での仕事からいわせていただくと、人文会の版元のみなさんの敷居が高いなというのを感じます。それと、あと僕が一番人文会に対して不満に思うのは、今、宝島社と社名が変わりましたけど、『現代思想入門』という別冊宝島のロングセラーがあるわけですけども、これがなぜ人文会の出版社から出なかったのか。こういった入門書ってのを、なんで人文会は作れないのか。そういった意味では今回の『知の技法』というのは事件だと思うんですよね。まあ、浅田彰の『構造と力』も同じだと思いますけど。

なんか、人文会から出る本というのはさきほどいったように、敷居が高い。どうしても伝統・文化、そういったものが前面に出ちゃっている。これがひとつにはお客さんに手に取りにくくさせている。排除されるお客さんを作っちゃっているということと、あと書店の中でもすごくやりにくいジャンルというか、たとえば、新人の書店員がいたときに人文書はちょっとやりたくないというふうなイメージを作っちゃっているという面があります。あとは、重版にしてもせっかく重版になっているのに、それがお客さんもしくは書店にすらその重版の情報が伝わってこない。常に書店では注文書を回すわけですよ。それが品切れで戻ってくるわけですね。その品切れで戻ってきた注文書というのはほとんど、その場でなくなっちゃうわけですよ。書店もそれをためておけるほどの余裕がない。そうすると重版になったときも、書店の棚からは消えたままということもある。書店にすら重版の情報というのがダイレクトに入ってくるソースがない。だから出版社の自己満足で重版しているだけかなみたいなことは、ちょっと感じちゃいますね。

僕がさきほど書店の側の主導型で復刊ということを言ったのは、ちょっと今回の趣旨からは外れるかもしれませんけど、書店の側にも本の値段をつける決定権があっていいじゃないかなというのを含めた話なんですね。いままでの流通制度の中で復刊をどう扱って行くかというのを考えると、やっぱり繰り返しちゃうんじゃないかな。だから、僕がすごく腹立たしいのは、いま書店の業種というのが、他業種から簡単に参入できるんですよ。書店業なんてものはないんですね。だれでもできちゃうわけです。いらっしゃいませ、ありがとうございましたさえ言えればできちゃうのがいまの書店業です。すごく悔しいですね。なんでこんなふうになっちゃったんだというと、ちょっと根本的な部分を書店の側からも考えないとこの先、あぶないんじゃないかなという危機感はありますね。

原田　もともと人文会というのは人文の棚をつくるために有志が集まってできたものなんですが、いまの書店さんが人文書と括っている内容からみてね、それは非常にもう少ない部分になっているんじゃないかと思います。浅田彰が十年前にあって、いまは東大さんの『知の技法』があるけれど、その間ないわけですよね。その間、人文会以外の出版社がどんどん目覚ましい本を出してきている。

渡辺　工学書協会という、いわゆる人文会と双璧になるような業界の有志団体がありますが、いま工学書関係でそれとは別個な組織で、現場主導型のいわゆる書店と出版社の特約店関係の見直しみたいなかたちで出てきたでしょ。同じように人文会の場合にもそういった地殻変動っていうか、そういうのは間違いなく書店の現場レベルではあると思うんですよ。だから、別に自社連立政権じゃないけど、従来の枠組みにとらわれない組織の見直しがあっていい、別に分裂を触発しているわけではないんですけど。

司会　今日のお話はいろいろ多岐にわたって、最後は人文会の問題点もかなりつっこんでお話いただけました。人文会は敷居が高いんじゃないかというのは正直いって耳の痛い話です。が、ともかく人文会も機動性をもって変らなくちゃいけないんじゃないかという提言として受けとめておきたいと思います。今日の話の中で何度も出てきたように、かつては売れていたのに今商売になりに

くくなっている人文書をなんでつくるのかという問いは永遠の問いだと思います。読者の活字離れがすすんで、また書店でも回転率の悪い本を置きたがらないという悪循環のなかで、にもかかわらず人文書にこだわるのは、さっきも申したように文化というものを我々が手離せないからです。だからこそやっているんだという回答しかしようがないですね。堂々めぐりですが、これは確実に前進していくための一歩だと思います。そうした理念が崩壊したら元も子もない。これだけは言っておきたいですね。ただ良書というか名著が切れないで続いて行くには版元と書店の間でうまい協力態勢が具体的にとれていかなければならない。お互いの有効な情報交換がもっとなされれば、少なくとも現状は維持できるだろうと僕らは思っています。

今日はお忙しいところをありがとうございました。

——1994.7.21——

草思社

こころと治癒力
——心身医療最前線
B・モイヤーズ／小野善邦訳
今、先端医療で何が起こっているのか。こころの科学的解明に迫る話題作！定価2500円

思春期病棟の少女たち
S・ケイセン／吉田利子訳
18歳で精神病院に入れられた作家の鮮烈な回想録。正気と狂気の境界を探る。定価1600円

イギリスのある女中の生涯
S・マーロウ／徳岡孝夫訳
牛飼いの娘はお屋敷に奉公に出た——今世紀初頭の英国庶民の暮しを語る。定価1600円

グレタ・ガルボ その愛と孤独（上・下）
A・グロノヴィッツ／永井淳訳
伝説の映画女優の謎の生涯。ガルボ自身が語った栄光から引退生活まで。定価各2000円

蛇頭（スネークヘッド）　莫邦富
——中国人密航者を追う
密航者、蛇頭の生々しい証言をもとに密航の手口、ルート等の実態を明かす。定価1600円

〒150 東京都渋谷区神宮前4-26-26
☎03(3470)6565 振替00170-9-23552

「養蜂販売」のすすめ

講談社
雑誌営業局副部長
永井祥一（ながいしょういち）

「この本買うたお客はん、次に何買うやろか？　て考えて仕入れるんです。同じ人は同じ本を二度買いまへんやろ」。このすばらしい発言の主は、大阪市にあるナンバブックセンターの飯尾浩氏で、これは「関西発書店元気便」という記事（「新文化」一九九四年六月九日号）に紹介されたものです。取材した記者は「ここで買った本がことごとくためになったり、次にこんなの読みたいなと思ってくるとすぐに見つかったり……」。と同書店の品揃えを感心したあとで、飯尾氏の言葉を引き出しながらその秘密を種明かししています。

このような、Aという本を買った人は、次にBという本を買うだろうと想定して棚にBを揃えておくという「図書相関関係」を利用して棚に仕掛けをした販売方法を、蜜で蜂を誘う花園にたとえて、仮に「養蜂販売」と名付けることにします。単純な例を挙げれば『ノルウェイの森（上）』を読んだ読者のほとんどは次には『ノルウェイの森（下）』を買って読むから揃えておく、これは「養蜂販売」の最たるものです。しかし現在市場に出廻っている出版物については、内容、点数からしてもこのように簡単にいくものではありません。

この養蜂販売を進めようとすると、書店員にはかなりの高レベルの能力が要求されます。誰にでもできるというものではないので、少なくともこの「図書相関関係」についての情報は、本の内容を熟知しているはずの出版社が、第一級の販売情報として積極的に書店や販売会社に提供すべきものでしょう。

「我々の世界ではこんなにありがたいものはありません。大変重宝な本です」。最近、古書業界の方々と話をする機会がありましたが、これは人文書をどう思っているかという私の質問に対する、目利きや値入れの能力が確かな古書業者の方の答えでした。

人文書をはじめ、専門書に対する世間一般のイメージは、堅い本、息の長い本と言えます。しかし火が付いたら黙っていても売れていくベストセラー書と違って、これらの本は放っておいて自然に売れることはまずなく、販売するのに特別な努力を要する本です。

販売上の努力は、手始めにいろいろ「仕掛ける」ことからスタートすることになります。そのための根拠になるのは、書店の販売実績データです。実際に本が売れているのか否か、どのように売れているのかを知るために、これをいかにして入手するかが問題となってきます。

出版物の販売データ収集の変遷は、概ね次の四期に分けられます。

第一期は、注文短冊の枚数（書店数）や注文部数、電話の掛かってくる度合いなど、出版社に来る注文や問合せの様子によって販売状況を判断するもので、かなり原始的な方法といえます。

第二期は、定点観測となるようなモニター書店を何軒か決め、電話調査で書店に状況を尋ねたり直接訪問して、売れたスリップの枚数を確認することで売れ行き状況を把握する方法です。

第三期は、モニター書店を決めその書店から売上カードを回収してくる点では第二期と同じですが、軒数を増やして精度を高めデータ把握のスピードを上げるために、回収には宅配便、売上カードの読み取りは高速読み

取り機を使用することが多くなります。講談社のＤＣ／ＰＯＳや筑摩書房が参加するレインボー・ネットワークなどがこれです。

第四期は、ＰＯＳデータの本格的利用です。ＰＯＳレジはまだ大手ＣＶＳと大型書店などの一部にしか導入されていないし、業界的にもこれを活用するレベルにまでは達していません。しかし出版社サイドでのバーコード表示の普及と業界内における情報ネットワークの構築、書店向けの廉価なＰＯＳレジが用意されるなどの条件が整えば、ＰＯＳデータによる単品管理とそれを利用する出版社も増えることになるでしょう。

注目すべきは、第一期から第三期までは常にスリップを媒介としていましたが、第四期ではそれを必要としないという点であり、その意味でこれから迎える第四期は、一種の業界革命ということができます。

どのような方法であれ、書店店頭における販売データの収集はかなり昔から行われていたと言えます。問題は集めたデータをどう生かすかですが、この点については拙著『データが変える出版販売』（日本エディタースクール出版部刊）に詳しいので、ご参照いただければ幸いです。

販売データの活用法の主なものを挙げてみると、第一には商品管理の面です。Ａという本が売れたというデータが得られたら、それと同じＡを補充するという単純な管理レベルから、販売予測をして品切れを起こさないようにするという高度なものまであり、ベストセラーなど大量販売を期待する本ではこれが重要です。次には、書店の販売管理に生かして店の販売力を分析するものです。どの分野に強いのかどこへシフトすべきなのか、競合関係はどうなっているか、売場スペースや棚は有効に活用されているかなどのチェックに用いられることが多くあります。さらには、どのように買わせるかというのもあり、これが前述の養蜂販売です。

「品切れを起こさない」というのは、Ａという本を買ったのとは別の人にＡを買わせようとするための販売であり、これは商品補充という基本的な作業です。しかし「次に何を読ませるか」というのは、Ａという本を買った同じ人に次にＢを買わせようとするための販売であり高度な仕掛けを必要とします。

売上高を伸ばす基本には、購売人口を増やすということと合わせて、このように購売単価や購売頻度を高めるという方法もあるのです。

この養蜂販売を成功させるポイントは、読者に買い易くするために、書店の棚のどこにこの本を陳列するのが最も良いのかということです。本来ならそれぞれの内容がわかっていて、しかるべき棚に陳列するのが普通ですが、どの棚に並べるのがもっともよいかを的確に判断するためには、かなりの知識とキャリアを必要とします。そこでそのための分類法の整備が必要になってきます。

コンピュータ販売研究会が独自に作成した棚分類コード方式は、コンピュータやそれに関する本について特別な知識を持っていない書店の担当でも容易に書目の分類ができるようになっていて、その点で評価されています。

ＩＳＢＮ（または日本図書コード）の有効利用も考えられます。日本図書コードには、ＩＳＢＮ（製品コード）の他に分類コードも含まれていて、この分類コードを販売面でさらに活用するために、内容分類ではなく販売分類もしくは流通分類として位置付けたら良いのではないかと思います。

この分類法を業界的に再構築するに当たっては「感度の高い」書店人に参加を求めたり、古書店での分類も参考にすべきでしょう。出版社の一方的な思い込みになってはいないか、本当に読者の欲求や意識に合わせた分類になっているのか、その点が重要であると思います。

私たちの学生時代は、『ドイツ・イデオロギー』を引用しながら「谷崎源氏」を小脇に抱えた女子大生を口説いた者がいたという、現在では全く考えられない読書状況の中にありました。そのときは、ともかく堅い本を読むことはカッコイイという「出版幻想」がありましたが、それを再度業界的に作り出す、仕掛けることができれば、出版の未来はさらに明るくなってくると思うのですがいかがでしょうか。

「人文会図書」購入をめぐって

青山学院大学図書館
収書課受入係（選書担当）　山村（やまむら）　修（おさむ）

本はわれとわが手で触ってみたい。六月のある朝、図書館の脇に書店のトラックが到着し、いよいよ「人文会図書」の第一回納品が始まった。まず勁草書房の本が千冊、誠信書房の本が二百五十冊、御茶の水書房の本が百二十冊といった具合に運び込まれると、その段ボール箱を開き、用意してあった八台のブックトラックに本を並べる。そのあと一冊一冊、発注記録および納品書と照合する。朝からたっぷり半日はかかるそれらの作業を、ほかの職員やアルバイトだけに任せてはいられない。見ているだけでは嫉妬心が起きる。いつものことながら、この「嫉妬」はわれながらよく分からない。

＊

当館の選書担当にとって、今年は「人文会の年」である。人文会に属する出版社の在庫品のうち、当館に所蔵しない図書をまとめて購入するという企画を、今年、実行に移しているからだ。じつは昨年は「大学出版部協会の年」であった。大学出版部協会に所属する全二十社の出版物のうち、当館で未所蔵の四千冊を発注した。できれば来年はまとめて「歴史書懇話会、国語国文学出版会、

法経会の年」にしたいと思っている。

名古屋大学附属図書館長・潮木守一氏が、本誌六八号（一九九三年十二月）に寄稿され、いまや図書館の天敵は「火、水、虫」などにとどまらない、「ほかならぬ本そのもの」が新手の天敵として現れたと書いておられる（「大学図書館の課題」）。本は増えこそすれ、減ることは絶対にない。「いくら図書館を増築していっても、終わることがない。増え続ける本のために図書館が潰れる。なにやら終末論的な匂いのする光景が頭にちらつく」。まこと真実を突いた「職業的恐怖心」（潮木氏）というべきで、現在、書庫スペースの問題で悩んでいない大学図書館はないといっていい。どの図書館でも書庫管理者にとって、本はまさしく永遠に増殖しつづける天敵なのである。もちろん彼の目には、その本をせっせと選んでは発注する選書担当者自身も天敵に映るだろう。

しかし潮木氏はさらにつづける。もともと図書館の所有冊数が貧しい。いかに大規模図書館であっても、日本の大学図書館の蔵書数はせいぜい四百万冊程度である。蔵書が一千万冊を越え、蔵書冊数の統制を現実的に図らざるをえないアメリカの大学図書館と同列に論ずる訳にはいかない。「要するに日本の大学図書館は依然として『原始的蓄積期』にあるとみるのが妥当なのではないだろうか」。潮木氏の文章で、氏が力点を置こうとしているのは、むしろそこである。

もはや書庫スペースはない、しかし図書館はまだまだ「原始的蓄積期」にあるというジレンマの中で、蓄積のための手を打ちつづけるのが図書館の内なる天敵、選書担当の仕事なのである。図書館の問題の底を探っていくと、きっと露呈するはずの一つの事実は、図書の貧困である。蓄財を怠ってきたがゆえの貧困である。

＊

その貧困を肝に銘じたのは六年前、一九八八年の夏であった。蔵書数においても、図書予算においても、あるいは選書のシステムにおいても、当館が他校に比べてかなり立ち遅れていることが当時の館長の問題とするところとなり、それなりの予算がついて、はじめて「選書」が図書館自身の仕事として確立されたその夏、この貧しい書架の姿をいま眼に焼きつけておかねばと思ったものである。十年かけて、この書庫の風景を一変させたいと

思ったものである。

図書館による新刊書の選書はその夏から始まった。

*

しかし本の蓄積の対策として、日常的におこなわれる新刊書の選書と並行して、いわゆる「旧刊」の欠落を補うべき手段もまた講じられねばならない。その手段の一つが昨年の「大学出版部協会図書」購入であり、また今年の「人文会図書」購入であった。

さて、それはしかし、なかなかに手間のかかる作業ではある。まず各社のカタログをもとに当館における所蔵の有無を調べなくてはいけない。今年の人文会の場合、対象となる二十一社（人文会所属二十三社中、昨年大学出版部協会として購入の済んだ東京大学出版会と法政大学出版局を除く）の全在庫点数は二万数千冊にのぼる。すなわちそれが二十一冊の各社カタログに載った図書の総数である。人文会から学生アルバイトを派遣してもらい、当館のオンライン端末で所蔵調査に入ったのが今年の四月初め、一日に一人ないし二人のアルバイトの作業で二万数千冊すべての所蔵チェックが終わったのが五月下旬であった。その結果、未所蔵であることが分かった約八千冊を発注したのが六月初め、発注先の書店から第一回の納品分一六〇〇冊が届いたのが六月末である。これから月に一度の割合で納品があり、この秋には完納される予定だ。もちろん本は納品されれば済むという訳ではなく、書庫に並ぶまでには目録・分類、装備といった作業工程を経なければならない。今年の人文会図書八千冊がすべて配架され、利用者が手にすることができるのは来春になるだろう。

*

書庫を歩いてみる。この六年で、書庫はたしかに少しばかり景色を変えてきてはいる。昨年の大学出版部協会の本で、またかなり彩りも変化した。選書したときの記憶がまだ残っている本を学生が手にしたり、カウンターで借り出していくのを見ると、ホッとする。そのホッとした気分が選書担当の報酬であるだろう。しかし、とまた狭くなった書架と書架との間を抜けながら思う、「こう狭くなっては——やはり天敵には違いない」

〔人文書講座31〕

流動化するアジアを読む

姜（かん） 尚中（さんじゅん）
（政治理論・国際基督教大学）

1　輻輳するアジア

アジアが発熱している。貧富の格差や強権政治、人権の蹂躙や環境の破壊、民族紛争や宗教対立など、おそろしく多様な矛盾をかかえながら、アジアという地域世界は、「成長の熱」にうかされたようにすさまじい勢いで変貌をとげつつある。近代の歴史のなかで汚辱と悲惨の体験を強いられたアジアが、世界でも最も活力に溢れた成長地域としてよみがえろうとしているのである。少なくとも経済的な成長に限って言えば、かつての従属理論や新・植民地主義などの分類が色あせるほど、新しい局面が生まれつつある。

考えてみれば、アジアという地理的な概念が、何らかの同一性（アイデンティティ）をもった主体的な存在として登場したことはこれまで一度としてなかった。それはせいぜいのところ、近代世界システムの中心に位置する西欧の「西力東漸」とともに、その残余として、あくまでも西欧を対称項にして作り上げられた概念にすぎなかった。アジアはひとつという、「アジア連帯」「大アジア主義」も、そしてその極限としての「大東亜」の心象地理も、西欧を対称項としなければ自らのアイデンティティが確定できなかった近代日本の「幻想」の所産であったと言える。その意味では一七世紀半ばのウェストファリア体制以来、国民国家のシステムを作為的に構成し、（人種主義的なニュアンスを含む）西欧文明という名

のもとに共通の秩序構想を練り上げてきた西欧とは著しい対照をなしている。

アジアとして括られる諸地域には、それぞれの置かれた地政的あるいは歴史的条件に応じて多様な局地的秩序がそれなりに機能し、その境界が相互に連結、重複し合ったり、あるいは牽引し合いながら、複合的なネットワークが形成されてきた。東アジアにおける中国を中心とする朝貢システム（華夷秩序とその同心円的な拡大）や島嶼地域を結びつける東南アジア遠隔交易のネットワークなど、ヒトやモノ、情報の循環は錯綜しながらも様々な交流のネットワークが機能していたのである。この限りでアジアには地域特有のゆるやかな文明圏の広がりがあり、そのなかで異質な諸要素が複合的に結合しあう関係が成立していたと言える。それは余りにも多様であり、雑多であることで、西欧のような確定的な同一性をそなえているとはいえなかった。しかしそこでのローカルな原理によって多次元的に組み合わされたネットワークのなかの共存によって、アジアは近代世界システムに編入、隷属される以前には多極共存的な世界をなしていたのである。それが崩れ、他律的な介入によってひとつの同一性を与えられるのは、世界システムの周辺部に位置づけられるようになってからである。西欧帝国主義による植民と、それに対抗するアジアの植民国家・日本の「共栄圏」を通じて、アジアは強引にひとつのカテゴリーのなかに結びつけられ、世界システムの中心や亜中心からみたアジア社会の同一性が確定されていくことになった。アジア的停滞や後進性、アジア的専制や伝統など、アジアの経済や政治、文化や習俗さらには民族や人種までをカバーする膨大な言説の体系が産み出され、アジアは西欧による知的あるいは文化的なヘゲモニーによる支配にさらされることになった。

にもかかわらず、アジアの多極共存的なネットワークは息の根を止められたのではなかった。それは、植民地支配や帝国主義による歪曲や侵略によって跛行的な発展を余儀なくされたり、また擬制的なナショナリズムの高揚による国民国家への囲い込みによって寸断されてきたとはいえ、決して完全に消失してしまったわけではない。

アジアの諸地域におけるローカルな「われわれの世界」は、西欧帝国主義と、とりわけ日本のアジア侵略に

よって多大の犠牲を強いられることになった。しかしながらある意味で日本はあの「十五年戦争」に敗北することによってアジアのなかにナショナルな「想像の共同体」が創られる契機を早めることになったのである。しかもそれはアジア的な多元性をもった地域的秩序を完全に国民国家システムのなかに同化することによって叶えられたのではなかった。同質社会的（ホモソーシャル）な文化の背景をもたないアジアには、民族と国民とを同一化し、それを国家のきっちりとした体軀のなかに閉じ込めてしまおうとする試みに抵抗する数々の「不純で」「異質な」諸要素が散在していたのである。

おそらくは西欧や日本のリジッドな国民国家のシステムからみれば「ルーズ」としか思われないローカルな原理によるネットワークこそ、アジアの社会と国家とを結びつけてきたのである。

今日東南アジア諸国が注目されるようになったのもそうした事情によるものである。もちろん、そこには過去と現在にわたって日本が大きな影を落としており、また冷戦以来のアメリカの影響が広く浸透していることは言うまでもない。

このようにみると空間的にも歴史的にもアジアが輻輳する諸要素から成り立っていることがわかるはずである。アジアはそうしたものを抱え込みながら休むことなく変容しているのである。

2　冷戦のもとのアジア

ところで冷戦の終結とともにアジアではこの地域のローカルな原理とネットワークから生まれつつあるサブリージョナルな経済圏やそれらをリンクしたより包括的な秩序が注目されつつある。しかし冷戦と同時進行することになった戦後の歴史的な歩みにおいてアジアではリージョナリズムよりはナショナリズムが基本的な秩序原理として受け入れられ、リージョナルな結びつきへと向かう動因がアジアの内部からは生み出されてはいなかった。そして覇権国家アメリカを中心とする上からの押しつけられたリージョナリズムが、この地域のナショナリズムと絡みあいながら対立を深めることになった。そうした冷戦下の経緯を見定めておくことは、東アジア経済圏構想など、アジア諸国の内部から主体的に形づく

られつつあるリージョナリズムの動きを見定めるうえで重要である。

冷戦の時代としての戦後におけるアメリカのアジアへの介入は、解放後のアジア諸国のナショナリズムと拮抗しながら進められていったと言える。

単純化して言えば、政治・経済的なアプローチであれ、軍事的・安全保障体制の構築であれ、冷戦の深まりとともにアメリカが構想し、実行しようとしたアジアの地域統合は、「上から」の押しつけによる性格が強く、その開かれた自由貿易体制とグローバリズムの主張にもかかわらず、実際にはアジアの植民地下の旧体制を温存させた垂直的な国際分業の強要という面をもっていた。この点はとくに反共の砦としての日本の復興にむけて東南アジア諸国を日本経済の原料と市場の「後背地」として人為的にリンクさせようとしたアメリカの対日および対アジア政策に色濃く反映されている。この限りにおいてアジアのローカルな原理にもとづくネットワークの多元性はほとんど顧みられることはなかったと言ってよい。

さらに朝鮮戦争の勃発以後は対中国封じ込めがアメリカのアジア政策の要となるにおよび、東アジアの分断国家である韓国と台湾の「前哨国家」としての意義が注目され、政治先行型の援助と投資が両国のテイク・オフのきっかけとなっていくことになる。戦後における日本の旧植民地諸国家との関係正常化も、こうしたアメリカの「上から」の地域統合に沿ってすすめられていくことになった。

戦後改革から逆コースそして日米安保と続く戦後日本の「占領・吉田時代」の保守主義の再生は、こうした冷戦下のアメリカのアジア介入と平行して進行していったのである。この限りで日本の戦後補償と戦争責任の問題は棚上げにされ、冷戦以後の時代にまで持ち越されてしまわざるをえなかった。

こうしてアジア内部の結びつきは、戦後も冷戦の影響のもとでそのローカルな実情に合った自然発生的な紐帯を断ち切られて、水平原理にもとづく均衡ある相互交流の可能性を奪われてしまうことになったのである。

他方、植民地からの解放が同時に体制選択の問題に直結し、それが内戦にまでエスカレートすることになった中国や北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の場合、冷戦の影響はある意味でより深刻であったと言える。

欧州における冷戦が「砲火なき冷戦」であったとすれば、アジアでは熱戦の形をとることになった。なぜアジアにおいて熾烈な地域戦争がくりかえされたかと言えば、それはこの地域が戦前の植民地支配からの脱却と、新たな国民国家の統合原理の確立という課題を抱えていたからである。このことは、社会主義か資本主義かの体制選択の問題とリンクしていた。内戦はこれをめぐって勃発したのである。中国の内戦と、それとリンケージした朝鮮戦争は、東アジアにおける冷戦を最も苛酷な形で実現することになり、とくに後者の爪痕はこの地域での脱冷戦の胎動を阻むことになった。

これらの動きに深くコミットすることになったアメリカは、冷戦の前哨国家を支援する一方、東アジア地域の軍事化を押し進め、共産圏の封じ込めに全力を注ぐことになった。しかしもともとアジアにおいては欧州の場合とは違い、明確に線引きできるような両陣営間の対立があったわけではない。むしろ植民地的隷属からの脱却と独立が主たる関心であったこともあり、アメリカの冷戦政策との間にズレがあったことは否めない。そのズレは、米中接近とベトナム戦争の終結および中越戦争の勃発という形で顕在化することになった。中国とベトナムの衝突は、アジアにおける冷戦が必ずしも両陣営の対立としてあらわれているわけではないことを示すとともに、アジアに共通のはっきりとした地域的な秩序構想が共有されていないことを物語っていた。

と同時にアメリカのアジアにおける地域統合構想は決定的に後退し、アメリカ優位の単独主義と勢力均衡にもとづく二国間関係の調整が前面に押し出されてくることになる。つまり、アメリカのプレゼンスをハブとして、アジア諸国がスポークのように結びつく国際関係が追求されることになったのである。アジア内部からの地域統合を牽制しようとするアメリカの動きは、「太平洋国家」アメリカの将来ともからんでアジアのなかに大きな影を落としている。

また日米関係に即して言えば、このようなアメリカのバイリテラルな関係を重視した戦略は、日本の「独り歩き」を阻むことになり、またこれに呼応しようとする保守勢力が長期にわたって戦後日本の政権を担ってきた結果、戦後アジアに受け入れられるような日本の改革はおざなりに終わってきたと言えよう。そのツケは、脱冷戦

とともにはっきりと意識されつつある。

このように冷戦期のアジアにおけるリージョナリズムは、この地域のローカルな原理によって支えられていたのではなく、逆に押しつけられたものであったため、大国の思惑によって変化せざるをえなくなる。このことは、すでに述べた通り、アジアの多元性と不均衡に起因している。しかしながらそれにもかかわらず、安全保障や政治の面からではなく、むしろ経済的なダイナミックスの面からリージョナルなネットワークが自生的に成長しつつあることは注目すべきである。

3　ポスト・冷戦時代のアジア

冷戦の終焉は、すでにみた通り、アジアの地域的安全保障や経済圏構想に対するアメリカの否定的な態度を決定づけ、二国間主義の比較優位にもとづく覇権国家アメリカのプレゼンスを確保する動きを加速させることになった。しかしながら、欧州と較べて冷戦がイデオロギー優位の対決よりはむしろ、解放後の独立と国民統合にかかわる体制選択の問題であったアジアにおいて、冷戦のタテマエはすでに米中接近の頃からいくつかの綻びをみせつつあった。そしてアメリカの安保の傘にあった「経済大国」日本のアジア地域への海外戦略の展開は、この地域の開発独裁型の発展と呼応しつつ、日本やNIES、ASEANや中国をも巻き込んだ域内経済圏の形成へと向かわせることになった。それは政治・安全保障の面でアメリカを中心軸（ハブ）とする冷戦型の国際関係をひきずっているとはいえ、経済的にはあたかも自然発生に近い形でリージョナルなネットワークを生み出すことになったのである。「環日本経済圏」や「東シナ経済圏」、「南シナ経済圏」や「インドシナ経済圏」。さらにこれらの経済圏のサブリージョナルとしていくつかの経済的な結びつきが出現しつつあり、それらが有機的に連鎖していくことによってブームと言えるほど成長の熱気が広がりつつある。この成長のうねりは、これらの地域内の政治的民主化を促し、アジアの急速な変化を押し進めつつある。

もちろんこれらの経済圏の誕生とその拡大は手放しで受け入れられるわけではない。その華やかな繁栄と成長のなかのアジアは同時に深刻な困難と矛盾をともなって

いるからである。環境の破壊や極端な貧富の格差、人心の荒廃と出稼ぎ労働者の急増など、急速な成長のツケは、混沌にも近い秩序変容のネガをいたるところにつくりだす結果になった。経済社会の急激な変化の渦が、権威主義的な政治秩序とのギャップを広げていくとき、そこから予測される混乱は想像を絶することになるかもしれない。とりわけ「社会主義的市場経済」を旗印に脱イデオロギー的な国家統合を模索し、そのために全面的な市場化政策の道を選択した中国の場合、中国型社会主義の政治秩序が存続しうるのか、きわめて流動的であろう。またポスト金日成体制の存続が危ぶまれる北朝鮮も、開放と改革の道を歩むことが残された選択肢であるとしても、北朝鮮の存在根拠そのものが問われる局面が予想されないわけではない。これらのことは東アジアに巨きな波紋を投げかけることにならざるをえないし、またこれをめぐってこの地域に死活的な利害をもつ国々の反応が注目されるところである。

さらに冷戦以後の成長セクター・アジアの現状を考える場合、この地域の国際的な分業と相互依存関係が、限りなく水平原理に近づくことができるのかどうかがカギとなると思われる。現在のところ北米と中南米、欧州とアフリカにみられるような典型的な垂直関係が支配しているわけではない。しかし今後水平的な関係が定着し、均衡のある経済圏が重層的に組み合わさっていくであろうという保証はどこにもない。むしろ微視的にみればサブリージョナルごとの重層的な垂直関係が組み合わさりながら全体としてみれば比較的水平に近いような概観を呈することになるのではないか。このなかでアジア最大の投資国家であり、円高以降、急速に生産拠点のアジア移転を進めつつある日本の動向が注目されている。

4　日本の「アジア化」と「脱アジア化」

世界システム論の立場からみれば、冷戦とはアメリカのヘゲモニーの構成要素であったと言える。世界経済システムにとってソ連邦や東ヨーロッパ諸国は「半周辺」ないしは「周辺」にすぎなかったのである。その意味で冷戦はアメリカのヘゲモニーの維持と結びついていた。しかしながらヘゲモニーによる主導は過渡的なものであり、アメリカの場合もその法則を免れることはできな

い。冷戦の終結は、アメリカのヘゲモニーの構成要素がなくなることを意味し、したがってアメリカの覇権も不可避となったのである。この事態はアジアにおいてもみられ、これと関連して日本とアジアとの関係が改めてクローズ・アップされることになった。

つまり日本が戦後一貫してそうであったようにアメリカの単独主義にもとづく二国間関係を基軸とみなすのか、それとも日本の「アジア化」を押し進め、アジアのなかで政治的な影響力を積極的に行使するようにすべきか、という問題が浮上するようになったのである。折しもアメリカではサミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』が注目を集め、文明のアイデンティティの衝突が冷戦以後の紛争を左右するカギになるという論調がアメリカ国内で有力になりつつあった。そこには「歴史の終わり」と自由主義（＝アメリカ）の勝利という基本的な認識が反映しているが、アメリカを中心とする価値尺度からズレるアジアへの違和感が示されていることは間違いない。そして日本もまた例外ではないとみなされているのである。日米関係のきわどさは、冷戦の終結によって一層深刻になっていくことが予想される。それと同時に日本のなかにかつての「大東亜」の記憶が新たによみがえり、新しいアジア共栄圏への積極的なコミットの動きもみられるようになりつつある。もちろんそれは四〇年代の再来でないことはあきらかである。にもかかわらず日本の「アジア化」は、ヘゲモニー国家との同盟関係なしに近隣アジア諸国との対等な関係を築くことができるかどうか、という困難な課題をつきつけることにならざるをえないであろう。

戦前の日英同盟そして戦後の日米安保にみられる通り、ヘゲモニー国家との同盟関係がアジアにおける日本の国益確保の道であり、その絆が切れたとき、日本の孤立化が始まったという観点に立てば、依然として日米関係がすべてに優先する機軸的な意義をもたざるをえないであろう。しかしこの選択は、「太平洋の架け橋」とはなりえても「玄界灘の架け橋」となる道は閉ざされたままである。このことは、冷戦の終結とともに日本の「アジア化」が話題となったちょうどそのときに「米国一国主義」であった戦後日本のツケが、戦後補償の問題として浮上してきたことにあらわれている。ここに戦後五〇年をむかえた日本のジレンマがあると言えよう。つまり覇

権国家中心の国際秩序に顔を向けたインターナショナリズムが、アジアに勢力を拡大するナショナリズムと裏表の関係にあった戦前の歴史を再び繰り返すのか、それとも日本の「アジア化」を進めつつ、同時に閉鎖的なブロック化に陥らないようアメリカなどにも開かれた「脱アジア化」を同時に模索できるのか、という問題である。それはおそらく近代日本が一度として経験したことのなかったような未踏のアジアの歴史に日本が足を踏み入れることを意味している。その確かな第一歩をしるすためにも戦後補償の解決は避けて通ることのできない課題である。

多元的な要素が輻輳するアジアに覇権国家のリージョナリズムを押しつけようとする道は再び挫折を余儀なくされざるをえないはずである。とすれば日本もまたアジアがそうであるようにその国土と制度の全般にわたってローカルな原理が複合的に組み合わさったネットワーク社会へと変貌していかなければならない。この意味で日本の「アジア化」とは、日本の国の形を替えることにも繋がっているのである。それなくしてポスト戦後への展望は開かれてはこないであろう。戦後憲法の将来も含めてアジアの目が日本に注がれていることだけは間違いない。

創刊！

ちくま新書

新書の森がざわめきだした……

第1回配本8冊 好評発売中 ―― 定価各680円

貨幣とは何だろうか　今村仁司
経済学を学ぶ　岩田規久男
日本の雇用――21世紀への再設計　島田晴雄
世界変動の見方　猪口孝
国連新時代――オリーブと牙　外岡秀俊
万葉集――歌のはじまり　古橋信孝
柳田国男の読み方――もうひとつの民俗学は可能か　赤坂憲雄
ニーチェ入門　竹田青嗣

筑摩書房
東京台東蔵前2-5-3　定価税込
サービスセンター☎048(651)0053

九四年度委員会活動について

去る六月二日、年次総会を開催し、九三年度の活動報告と会計報告を行ない、次いで九四年度の新体制を決定いたしました。

代表幹事には引き続き菊池明郎氏（筑摩書房）が、書記に武一雄氏（雄山閣出版）、会計に古川清氏（青木書店）がそれぞれ留任いたしました。

次に人文会の活動を構成する四つの委員会のうち三つの委員会で委員長が交代しました。新たに就任した各委員長と留任の委員長に今年度の活動予定の抱負を語ってもらいました。

販売企画委員会

委員長　福田　晴行（みすず書房）

昨年は人文会創立25周年記念行事の一貫として刊行致しました「人文書のすすめ」の販売に際し、取次店様、書店様各位には並々ならぬご協力をいただき、またフェアにも賛同いただき、誠にありがとうございました。本年も引き続き販売企画委員長を勤めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本委員会のメンバーは昨年同様、副委員長に清水博（社会思想社）、委員には杉田啓三（ミネルヴァ書房）、鈴木龍太郎（春秋社）、高橋睦美（有斐閣）とここまでは変わりない顔ぶれですが、販売促進のプロ丸山正美さん（平凡社）が弘報委員会にスカウトされまして、代わって、強力大物仕掛け人の氏家富男さん（勁草書房）が参入し、総勢六名で運営して参ります。本年もよろしくお引き回しのほどお願い申しあげます。

さて、今年も「すぐれた人文書の普及・販売を積極的に推進する」ため、販売に携わる書店様、取次店様のお知恵を拝借しながら各種の企画を進めていきたいと考えております。

本年度の活動としましては、すでに終了しましたが、昨年同様、特約店、準特約店、セット店訪問を7月中旬

～8月初旬にかけて中部、東海、常磐、上越、甲信の5ルートに各委員が分かれてお伺いし、お忙しいなかアンケートにお答えいただき、貴重なご意見等もあわせていただき大変お世話になりました。厚く御礼申しあげます。これらのアンケートやご意見をもとに、より効率のよい人文書セット作りを目指し努力していく所存です。またテーマ別のフェア等も展開して参りたいと考えておりますので、その節はよろしくご協力のほどお願い申しあげます。

調査研修委員会

委員長　濱地　正憲（誠信書房）

人文会の会則に「すぐれた人文科学書の普及と販売を積極的に推進する」とあります。その手段として、当会は委員会制度を設けています。過日、開催された第27回総会におきまして私が調査研修委員長に選出され、今年一年活動することになりました。メンバーとしましては平石副委員長、小林委員、重光委員、後藤委員の計5名の構成です。

当委員会はその名のとおり調査部門と研修部門の活動があります。調査については、本年度は特約店調査があります。会員版元の契約している常備書店様からお送りいただくスリップを集計し、分析いたします。集計一覧表は各版元で、今後の常備政策や販売戦略に使っております。さらには、特約書店様のメリットの追及という課題があります。この十月に調査開始をすることになっておりますので、売上スリップは是非とも各版元にお送りいただきますよう、お願い申し上げます。

また、業界動向を見ますと流通も大きく変化していくものと思われます。情報ネットワークとしての業界VANが書協の元で推進されておりますし、取次各社の送品体制も充実してきているようです。そして、消費税の今後の動向や再版制度の問題などしっかりと見据えながら活動していきたいものと考えております。

研修におきましては、この秋、特約書店様を訪問させていただき、交流を図りつつ勉強させていただく所存です。

書店様のなかで棚構成を考えてみたいとか、こんなシステムを考えているとかございましたら当委員会までお申し出ください。一緒に模索しながら活動が推進できれ

ばと思っております。

図書館委員会

委員長　尼子 英二（紀伊國屋書店）

前任の市川さん（法政大学出版局）を引き継ぎ、今年度の図書館委員会委員長を命じられました。当委員会は人文会の委員会の中では最も新しいものですが、専門書出版を中心とする人文会にとっては、図書館との密接な関係がきわめて重要であることは言うまでもなく、その間の橋渡しをする重要な使命を担っているのが我が委員会だと考えております。

先日の新聞発表によれば、中、高生の活字離れは益々進み、約40％は一ヵ月に一冊も本を読まないというショッキングなものでした。これは出版社のみならず、書店や図書館にとっても、まさに〝天下の一大事〟であって、この傾向と対策は業界、関係者が一丸となって必死に考えないといけない問題です。人文会会員社は、それぞれの版元の良心と使命感をもって良書を刊行しているグループと確信しておりますが、それと同時にそれぞれの経営を成り立たせないといけません。その経営基盤を最低限支えていただくのが大学図書館や公共図書館であっていただきたいというのが、われわれの願いです。虫のいいお願いかもしれませんが、まったくの本音であると思います。

図書館委員会は、人文会各版元と図書館との意見交換をより一層強くしていくことを活動方針としていきます。読書の喜びや楽しみを若い人に与えていくために、また蔵書の充実のために、人文会は図書館の人たちとできうるだけの協力をしていきたいと考えています。その意図するところのご理解とご協力をお願いいたします。

今年度の図書館委員会のメンバーは次の通りです。

副委員長　島田孝久（晶文社）
委　　員　市川昭夫（法政大学出版局）
　　阿部　昇（吉川弘文館）

弘報委員会

委員長　西谷 雅英（未来社）

一昨年より弘報委員会に所属し、人文会ニュースの編集実務を担当してきたわたしですが、今年度も引き続き弘報委員会で、しかも委員長という大役を若輩の身なが

ら仰せつかることになりました。

弘報委員会は、会活動の実態を業界内部の人たちや一般の読者人に〝弘く報せる〟ことを第一義としております。それとともにいま会が何を考え行動しようとしているのかを発信するメディア機構も担っております。今不況の波が押し寄せている出版界ですが、そのなかで人文書を出し続けていくことはますます困難なことになっています。だが、わたしたちは足を止めるわけにはいきません。現状分析はもとより、具体的に提案できることを業界に向けて精一杯やりたいと思っています。

弘報委員会の具体的な仕事は、

一、年三回の「人文会ニュース」の発行。今年は座談会などを復活させて、手間暇をかけた誌面づくりを心がけます。

二、会員社の刊行物を掲載した「新刊月報」を毎月一回発行。図書館の在庫チェックや選書にご活用ください。

三、その他、フェアに関連したシンポジウムや人文書講座を利用したイベントなどを推進する方向でやりたいと考えています。

最後に今年度の委員会メンバーをご紹介いたします。

副委員長に吉田信夫氏（東京大学出版会）、前々委員長の土屋知可夫氏（福村出版）と前委員長の原田敦雄氏（大月書店）ら経験者が揃い、新たに販売企画委員会から丸山正美氏（平凡社）が加わり計五人で構成されます。

堀尾輝久著
日本の教育
●四六判・二七八一円
地球時代に生きる子どもたち――その将来に向けて日本の教育はどうあるべきか。その分析視点を提示すると共に、明治維新から現在までの流れを政治や経済との関連でとらえた近・現代史にもなっている。

黒崎　勲著
学校選択と学校参加
アメリカ教育改革の実験に学ぶ
●A5判・三九一四円

近藤邦夫著
教師と子どもの関係づくり
学校の臨床心理学
●四六判・二五七五円

東京大学出版会
東京都文京区本郷7東大構内
TEL03-3811-8814
FAX03-3812-6958

人文会会員名簿

（〒111　台東区蔵前2-6-4　筑摩書房内）　　1994．9．現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
幹事	青木書店	古川　清	101	千代田区神田神保町1-60	3219-2341	3219-2585
	大月書店	原田　敦雄	113	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石　修	113	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	尼子　英二	156	世田谷区桜丘5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁草書房	氏家　富男	112	文京区後楽2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社会思想社	清水　博	113	文京区本郷3-25-13 中銀本郷3丁目ビル	3813-8105	3813-9061
	春秋社	鈴木龍太郎	101	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
	晶文社	島田　孝久	101	千代田区外神田2-1-12	3255-4501	3255-4506
幹事	誠信書房	濱地　正憲	112	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創元社	重光　義彦	162	新宿区山吹町334-11	3269-1051	3269-1092
	草思社	小林登美夫	150	渋谷区神宮前4-26-26	3470-6565	3470-2640
代表幹事	筑摩書房	菊池　明郎	111	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	吉田　信夫	113	文京区本郷7-3-1 東京大学構内	3811-8814	3812-6958
	日本評論社	後藤　光行	170	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
	福村出版	土屋知可夫	112	文京区小石川1-3-17	3813-3981	3818-2786
	平凡社	丸山　正美	152	目黒区碑文谷5-16-19	5721-1234	5721-1239
	法政大学出版局	市川　昭夫	162	新宿区市谷田町2-14-1	5228-6271	5228-6010
幹事	みすず書房	福田　晴行	113	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
	ミネルヴァ書房	杉田　啓三	607	京都市山科区日ノ岡堤谷町1	(075) 581-5191	(075) 581-0589
			162	新宿区市ケ谷山伏町5	3267-3849	3235-9539
幹事	未來社	西谷　雅英	112	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
幹事	雄山閣出版	武　一雄	102	千代田区富士見2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有斐閣	高橋　睦美	101	千代田区神田神保町2-17	3265-6811	3262-8035
	吉川弘文館	阿部　昇	113	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会　◎福田　○清水　氏家　杉田　鈴木　高橋
弘報委員会　◎西谷　○吉田　土屋　原田　丸山
調査・研修委員会　◎濱地　○平石　小林　後藤　重光
図書館委員会　◎尼子　○島田　阿部　市川

画家ダヴィッド

革命の表現者から皇帝の首席画家へ

鈴木杜幾子　ふたつの苛烈な時代を生き抜いたフランス新古典主義の代表的画家。その生涯と仕事を通じて、忘れられた西洋近代絵画の正統を掘り起こした気鋭の力作。　4200円

公共性の喪失

リチャード・セネット　北山・高階訳

19世紀の市民社会の成立時から、私的生活の肥大と公的生活の衰退を歴史的に検証し、「公」と「私」のバランスを欠いた現代社会のメカニズムを鋭くえぐる野心的研究。　5800円

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話(3255)4501

老いとの対話　死との対話

猪俣満子著　選択の余地のない道を生きた普通の主婦が、三人の肉親を看取り、そして自らの〝老後〟は海外移住へ。その力強さ、明るさが胸をうつ感動のエッセイ集。　四六・一八〇〇円

◉主婦翻訳家留学始末記　予価一七〇〇円

マダム・ジャポンは袋だたき

福本秀子著

社会思想社

東京都文京区本郷3・Tel 03-3813-8101

影響力の武器

なぜ、人は動かされるのか

ロバート・B・チャルディーニ―著
社会行動研究会―訳

定価3400円

誠信書房　東京都文京区大塚3―20―6　TEL.03―3946―5666

シモーヌ・ヴェーユ

その劇的生涯

■C. ダルヴィ他／稲葉延子〈編訳〉

稀有な女性思想家の生き方に迫る話題の戯曲と兄アンドレ、吉本隆明らの発言を付す、最良のヴェーユ入門。1900円

〈第II期〉

G.K.チェスタトン著作集

〈評伝篇〉全5巻

◆P.ミルワード〈編集・解題〉

❸ブレイク／ブラウニング

■中野記偉訳　詩人、画家ブレイクの神秘に迫る刺激的論考と、漱石も絶讃の出世大作『ブラウニング』。　2900円

既刊 ❹バーナード・ショー　安西徹雄訳 2500円

▶定価は消費税込み

東京都千代田区外神田2-18-6　**春秋社**　☎(03)3255-9611　振替東京8-24861

現代進化学を一望する

講座 進化 全7巻

柴谷篤弘・長野敬・養老孟司—編

●A5判上製カバー装／平均240ページ●各2472円

❶進化論とは／❷進化思想と社会—〔9月刊〕

東京大学出版会

「知の再発見」双書

フランス・ガリマール社と提携
世界14カ国で出版

ゴヤ スペインの栄光と悲劇

堀田善衛監修 動乱の18世紀に活躍し、ヨーロッパ絵画史上においてもひときわ輝く巨人ゴヤの足跡を豊富な図版でたどる。1300円(税込)

モーツァルト

海老沢敏監修 17歳まで旅に生き、ヨーロッパ文化を吸収し、その粋を音楽に表現した神童の足跡を興味深い図版で描く。1300円(税込)

創元社 大阪市北区西天満1-4-2 東京都新宿区山吹町334-11

シルバー世代の最新ホーム・ガイド

全国有料老人ホームの選び方

国民生活センター／編 2600円

全国147ホームの実態を公的機関が調査。最も信頼できるガイドブック

不登校児の新しい生活空間

河合 洋／編 1600円

学校以外のユニークな教育現場が注目されている。その共同生活を紹介

日本評論社

豊島区南大塚3－10☎3987－8621

J・ブルクハルト 新井靖一訳

ギリシア文化史 全5巻

文化史の巨匠の主著、待望の本邦初全訳。ギリシア人の文化、すなわち彼らの全生活における「考え方と物の見方」の変遷を、厖大な文物によって跡づけた古典的名著。A5判。

●第1回好評発売中 第1巻 6900円

筑摩書房 〒111 台東区蔵前2－6－4 ☎03(5687)2680(定価は税込)

ユング伝

G・ヴェーア著　村本詔司訳

師フロイトとの出会いと別れ、「夜の航海」と称される無意識との凄絶な闘いなど、86年にわたる生涯と仕事・影響について、比類なき膨大な資料を駆使して克明に描き出す。 4,200円(税込)

河合隼雄監修

臨床心理学
4.実践と教育訓練

齋藤久美子・鑪幹八郎・藤井虔編

心理臨床に関わる様々な領域や問題について事例を交え詳述。3,000円(税込)

創元社　大阪市北区西天満1-4-2　東京都新宿区山吹町334-11

最新刊

ハンディキャップ教育・福祉事典

Ⅰ 発達と教育・指導・生涯学習
Ⅱ 自立と生活・福祉・文化

石部元雄・伊藤隆二・中野善達・水野悌一 編

ハンディキャップを持つ人の発達と自立のために必要なあらゆる知見・情報を、生涯発達の視点にたって詳細に解説。

各巻A5判／定価一八〇〇円

東京・文京 小石川1-3　福村出版　電話 (03) 3813-3981

＊定価は税込＊

これからの世界史

書下ろし〈全13巻〉

21世紀へ向けて——日本の代表的な学者が近代を根底から問い直す

●定価各2,800円(税込)

❶近代世界を剝ぐ（西欧近代の歪みを暴く）廣松 渉
❸「日本」の原型（鬼界ケ島から外ケ浜まで）いいだもも
❺ラーム神話と牝牛（ヒンドゥー復古主義とイスラム）小谷汪之
❽神々の力と非力（近代にとってキリスト教とは？）森安達也
❿近代の今日的位相（ギデンズ理論を踏まえて）田口富久治
⑨国民国家のエルゴロジー（国家の老衰過程を物語る）加藤哲郎（1月下旬刊）

好評発売中

平凡社　〒152 東京都目黒区碑文谷5-16-19　振替00180-0-29639/☎03-5721-1234

不登校児からの手紙

立川 孝／著　1339円

情緒障害学級で15年間不登校児とつきあってきた元中学教師が、子どもたち、親たちと手紙のやりとりを通じて《共通の言葉》を探し求めた感動の記録。

炭じん爆発

三池三川鉱の一酸化炭素中毒

原田正純／著　16480円

一瞬にして458人が死亡した事故から30年、CO中毒事件を見据えてきて、そこで見たものは水俣と同じ生産優先と人権無視の構図だった。

日本評論社

豊島区南大塚3-10-10☎03-3987-8621

法政大学出版局

L・フェリ／加藤宏幸訳　二八八四円（税込）

エコロジーの新秩序

樹木、動物、人間

中世・近世の動物訴訟からナチスのエコロジー、現代のディープ・エコロジーまでをあとづけ、人間中心主義と自然の神聖化を共にのりこえた民主的エコロジーをめざす

〒162 東京都新宿区市谷田町2-14-1
☎03-5228-6271 振替00160-6-95814

ミネルヴァ書房

通史で学ぶ政治思想への第一歩

概説 西洋政治思想史

中谷猛／足立幸男編著

プラトン、アリストテレスからロールズ、ノージックまで―西洋政治理論の歴史を彩る思想家の知的遺産の発見・継承・展開を辿り、現代的意義について考察すると共に、人生にとっての政治の意味を探究する。　三〇〇〇円

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話075(581)5191　振替01020-0-8076

現代詩が若かったころ

飯島耕一　笑いとエロスと叫び、そして挑発力。詩人が翻訳し解題した刺戟的な最新「シュルレアリスム詩集」　三〇〇円

声のないところは寂寞

詩人・何其芳の一生　宇田禮　現代中国の歴史的現実のなかで、思いがけぬ抒情的響きをもつ詩に魅せられ、詩人の原郷を尋ねる旅。　三八〇円

民主主義に万歳二唱

I フォースター著作集 11　友を裏切るよりは国を裏切る勇気をもちたい。リベラリズムと個人主義の真髄を示す三〇篇。　小野寺・小池他訳　三七〇円

ウフィツィ美術館

スカラ／みすず美術館シリーズ 9　ボッティチェルリの「春」他、イタリア・ルネサンスの精髄を伝える三三六点。シリーズ全九巻完結。　田辺徹訳　四九〇〇円

東京文京本郷3丁目17-15　みすず書房

ユルゲン・ハーバーマス著／細谷・山田訳

第2版 公共性の構造転換

一九六二年に刊行され現代市民社会への考察で画期的成果を収めた著書に新版序文を増補◉三九一四円

W・J・モムゼン著／安・五十嵐他訳

マックス・ヴェーバーとドイツ政治 1890～1920 II

ヴェーバー学の論争の火種となった第一次世界大戦～ワイマール期の政治思想を扱う◉六六九五円

未來社　東京都文京区小石川3-7-2 (03)3814-5521（価格は税込）

非売品

1994年9月30日発行　年4回発行　第70号
発行所　人文会　筑摩書房内
〒111 東京都台東区蔵前2－5－3

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印